

色彩から見た文化発達度の問題

A Problem of Colors & Cultural Level

平澤 洋一*

要 旨

文化の発達につれて民族は色彩基本語の数を増やしていき、文化度と主要色彩語との間には高い相関性がある、とバーリン・ケイはいう。また、このような普遍論には相対論からの反論が出され、論争を繰り返してきた。本稿では、文献調査と実態調査をもとに、意味論の立場から外界と認知と意味領域の問題を再検討し、普遍論では説明のつかない言語事実を提示した。そして、日本語の色彩系列では「青」が鍵になることをつきとめた。

Yoichi HIRASAWA

Abstract

According to Berlin & Kay, a nation adds the number of fundamental color words as culture become high level, and these two factors are correlated. But their universal theory met with opposition from relativist, and they argued the problem over and over. With referring to the literature and the actual situation of recognition of color, we reconsidered things, recognition and the area of meaning from a point of semantic views. We found the linguistic fact that is hard for universalist to explain. “青” holds the key to recognition of colors in Japanese.

1. はじめに

言語は思考と深い関係を持ち、人間を取り巻く世界（外界）のさまざまな事物や関係をカテゴリー化する機能をもつ——このような言語認知論からの指摘は、レーヴェース^[1]など多くの研究者によってなされ、実証的な研究が積み重ねられてきた。その典型的な例はバーリン・ケイ^[2]の色彩認知に関する研究報告である。

98種の言語を調査対象にしたバーリン・ケイの研究は、(1)主要な色彩語はもっとも少ない言語で2語、もっとも多い言語で11語である、(2)色彩カテゴリーの広がりには個別言語で差があるものの「赤」なら「赤」、 「青」なら「青」というカテゴ

リーの焦点は同一である、(3)文化の発達につれて民族は色彩語の数を増やしていく、(4)そこには次頁図A、Bのような語系列が観察され、(5)普遍性の原理が働いている、と指摘した。

これには、言語相対論の側からの反論が出された。(a)物理的なスペクトルは変わらないのに、(b)色彩認知枠の違いが生まれ、(c)それを反映して語形とその意味領域^[3]の違いが生成される、という反論である。

(b)の色彩認知枠の違いは、言語の違いによって生じると考えるのが定説であるが、後で述べるように、認知差は同一言語圏や同一民族内においても顕著に見られ、民族・言語・文化圏・性・年齢など複雑な要素に起因していることが、これまでの調査で明らかになった^[4]。また、普遍論者バーリン・ケイの(2)と、相対論の(b)とはかなり近似した面を含んでおり、これを認知枠と意味論上の意味領域と語形との関係として捉え、いかに整合的・体系的に理論化していくかが、この問題の中心に

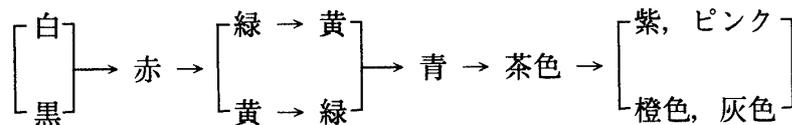
* 城西大学女子短期大学部教授

〒350-02 埼玉県坂戸市けやき台1-1

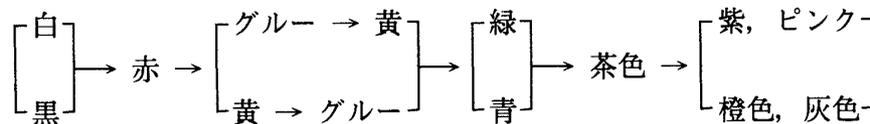
Phone 0492-86-2233

Josai University Junior College for Women 1-1, Keyakidai, Sakado, Saitama, 350-02 JAPAN

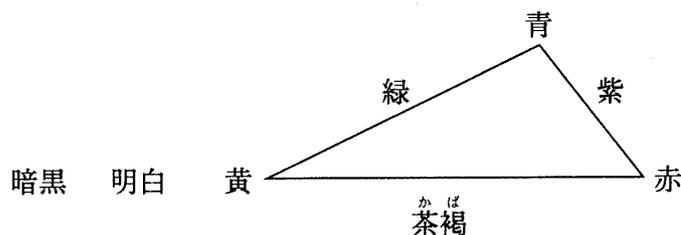
A パーリン・ケイの系列図



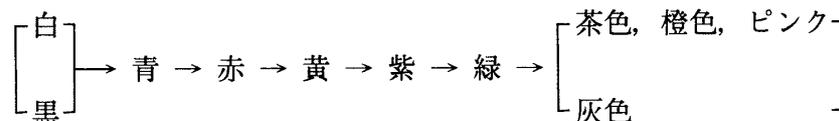
B 同修正案



C 渡辺華山の系列図



D 日本語色彩語彙系列図（試案，赤の主領域は紅・朱）



なってこよう。そこで本稿では、色彩の認知枠と日本語との関係、とくに「赤」と「黄」の認知と使用語彙との関係に重点をおきながら実証的に考察してみたい。

中西進先生のご論考^[5]によれば、『万葉集』の時代の基本の色は「赤」と「青」であり、「黄」は、『万葉集』の中には疑わしい例が一つあるだけで、これを「き」と読むか「に」と読むか学説の対立がある。

この「赤」は西欧のような red の赤ではなく、赤漆が薄くなった時の朱色のような色と思われるが、これはあくまで「赤」という語形の指示する意味領域であるにすぎないから、中西先生のご指摘と図A、Bの意味するところとは矛盾しないのであろうか。

2. 「青」と「赤」

万葉の時代の基本色が2色だとするならば、図A、Bにおいて「青」が発達する前に、色彩カテ

ゴリーにおいても色彩語形においても「黄」の使用がもっともっと安定化していなければならないはずだからである。図A、Bの系列で日本の色彩語も発達したとすると、「黄」がかなり未発達なうちに緑や青が発達したことも考えられ、色彩と語の発達の相関性と整合性に疑問がわいてくるし、日本では、西欧などとは異なった色彩文化の発達があった可能性も出てくる（したがって「黄」を最終的にどのように扱うかが問題になるが、それは後述する）。

図A、BおよびDの色彩語と文化度との対応を整理すると、表1のようになる（図Cは文化度についての記述がないので省いた）。

表1のパーリン・ケイの修正案の上段のように「グルー〈=グリーン+ブルー〉」を立てると、グルーの中のカテゴリー「青」が、「赤」のすぐ後に位置することになり、中西説を支援するかに見えるが、色彩語の発達が白/黒→赤→グルー→黄→緑/青→茶色→紫/ピンク/橙色/灰色では、

表1 色彩語彙と文化発達度

説	文化度1	文化度2	文化度3	文化度4	文化度5	文化度6	文化度7
A バーリン・ケイ	白	赤	緑	黄	青	茶色	紫／ピンク
	黒		黄	緑			橙色／灰色
B 同 修 正 案	白	赤	グルー	黄	緑／青	茶色	紫／ピンク
	黒		黄	グルー			橙色／灰色
D 試 案	白	青	赤	黄	紫	緑	茶／橙／ピンク
	黒						灰色

奈良時代の「黄」や「赤」の実態から見て、疑問が残る。そこには、

- (a) 万葉時代の「赤」は西洋のような red ではなくて、上代から続いてきた〈赤漆の薄くなった朱色〉のような「赤」であったこと。
- (b) 『万葉集』の「黄」は黄蘗色（黄色）の系統とする説や丹色（赤土の色）と解釈する説があり、「黄」が現代の「赤」の領域の一部を指した可能性が高いこと。
- (c) バーリン・ケイの指摘した「グルー」のような意味領域〈緑+青〉は、上代の日本にも存在していた。

などの問題がある。(c)だけならいいが、(a)や(b)を考慮すると、バーリン・ケイの修正案のプロセスでは日本の色彩の発達は説明できなくなり、バーリン・ケイの唱えた「普遍性」の可能性に赤信号がともってしまう。

万葉時代の日本語の語形「赤」の示す意味領域の中心が〈赤漆の薄くなった色〉、「黄」の領域の一部が〈赤土の色〉であるなら、語形「黄」が「赤」と重なる意味領域ないしは非常に近い領域を指し示すことになる。2語形による意味の分化がまだ明確でなかったということは、「グルー」と同様の現象が「赤」「黄」にも見られるということになるので、この色彩カテゴリーを「黄赤」として、日本語の色彩語系列図を示すことも不可能ではない。

肝心なことは、「黄赤」や「グルー」といった

意味未分化の現象は、語彙論・意味論上の特殊な現象ではないということであり、「黄」と「赤」、「緑」と「青」のような意味の分化の困難さは、個人差に起因する認知枠のゆれや語形選択の混同などによって生じたものであり、この類は語彙にはたびたび観察されることである。

語彙のもつ意味領域の重なりは、ある特定の意味領域に複数の語が対応するという言語現象であり、しかも意味領域と語との関係は、いかなる言語においても恣意的・相対的であるから、外界と認知枠と意味領域と語との関係は、語彙体系や言語体系全体としてはある程度の普遍性を有するとはいえず、常に個別的であり流動的である。

それ故、認知差と意味領域の問題は語彙について回らざるをえないという運命にあり、このあたりが音韻や文法の普遍性とはおおいに性格を異にするところである。

(a), (b)の示す意味領域〈薄い朱色〉〈黄蘗色〉〈赤土の色〉は、万葉時代の「赤」の色彩カテゴリーに収まり得る色なので、日本語のプロセスは表1のBの修正案の下の方のプロセス、つまり白／黒→赤→黄→グルー→緑／青→茶色→紫／ピンク／橙色／灰色という流れをとったとすると、「赤」は〈薄い朱色〉と「黄」の（黄蘗色～赤土の色）という領域が混同され重なったと解釈され、「グルー」だけが未分化で存在したことになる。それでは「黄赤」と「グルー」が、異なる規準で意味処理されることになり、意味論自体に支障が生じてしまう。

となると、焦点は「黄赤」をどう扱うかということになるので、奈良時代の色彩語の使用状況を再検討していくことにする。

3. 色彩語の頻度

棚村・平澤の色彩語調査^[6]によれば、『万葉集』で使用頻度の高い色彩語は白系^[7]の語で、302例出てくる。

白系302例の内訳は、白波62, 白濱4, 白沙1, 白嶺1, 白雲31, 白露28, 白気1, 白雪6, 白鳥2, 白鶴1, 白鷺1, 白つつじ・白躑躅3, 白樞1, 白管4, 白栲・白木綿70, 白麻衣1, 白紐1, 白玉26, 白珠3, 白香(麻や楮などを細く長く裂いて神事に使うもの)3, 白眞弓6, 白酒1, 白塗1, 眞白斑(白いまだら)1, 白水郎(海女)13, 白髪9, 白鬚1, 白き1, 眞白2, 白細砂(枕詞)1, 白遠ふ(同)1, しらぬひ(同)1, 川上の根白高草(序)1, 白神1, 白崎1, 白山1, 白月山1, 白羽1, 藤白1, 白し4, 白く(動詞)2例である。

白に較べ黒は少ない。黒系は45例。黒髪25, 黒馬3, 黒駒2, 黒木(皮つきの丸木)4, 黒酒1, 黒沓1, 大黒1, 小黒1, 黒牛瀉・黒牛(地名)3, 黒髪山2, 黒色1, 黒し1例。白が「ハレ」の色で輝き・喜び・清潔感などをあらわすプラス感情性のあるのに対して、黒は「ケガレ」の色であり宗教性やタブー性や死などがまつわりつくために敬遠されがちだったのであろう。

赤系は28例。赤駒11, 赤土(赤黄色の粘土)3, 赤葉1, 赤裳9, 赤絹1, 赤らひく(赤みを帯びた)1, 赤見山1, 赤し(疑いや心のくもりがない)1例。

紅系は33例で、紅28, 紅(若く美しい女性, 比喩)1, 紅の花(末摘花)1, 紅の(枕詞)1, 紅の(序の一部)1, 紅色(序の一部)が1例。朱系は4例で、朱華色(初夏に咲く朱華の赤い色)2, 眞朱(赤土)が2例。紅は赤より若干多いとはいえ、青の69例, 黄の98例に比べると、かなり少ない。また、紅には比喩用法も散見された。例えば『万葉集』四一〇九では紅を「紅花で染めた衣, 若く美しい女性」の意で、一三一三では「紅の深染めの衣」全体で「妻」の意に使う。二六二

四の「紅の濃染の衣」は「思う人, 恋心の相手」の意味で使っている。

茜系は、枕詞の「茜さす」が11例見られたにとどまる。

黄系は98例を数える。黄土(黄赤土)4, 黄泉3, 黄葉80, 黄金2, 黄楊4, 楊枕1, 黄染1, 黄色ふ(黄葉する)1, 黄変つ(紅葉する)2例。黄葉はモミヂ・モミヂバと読ませており、赤葉のモミヂバとぶつかる。

緑系は11例である。緑児・緑子などが8例, 緑2, 浅緑1例。青系はこれよりは多い。69例。青山6, 青嶺2, 青雲4, 青海原1, 青波2, 青葉2, 青柳・青楊12, 青草1, 青駒・青馬(灰色がかった白馬)3, 青衿1, 青根が峯(地名)1, あをによし・青丹よし・青丹吉(枕詞)20, 青旗の(同)2, 青みづら(同)1, 青幡の(同)1, 青垣山1, 青香具山2, 青菅山1, 青垣山1, 青し3, か青なる2例。

紫系は33例で、紫草・紫(略称)6, 紫陽花1, 筑紫(地名)14, 紫野1, 紫7, 紫の(枕詞か)が4例ある。

以上をまとめると、白系302例, 黒系44例, 赤系76例(赤28, 紅33, 茜11, 朱4), 黄系98, 緑系11, 青系69, 紫系33例となり、派生語の頻度も白・赤・黄・青系が高い。

4. カテゴリーの頻度

前節で扱ったのは色彩語が作品の中に使われた頻度数であったが、梅・馬酔木・卯の花といえ白, 桃・桜とくれば淡紅, 萩なら淡紫という色彩カテゴリーを作者が認知しイメージして歌ったわけであろうから、歌われた花を分類することで色彩カテゴリーの頻度数を知ることにもできる。これには先学の研究があり、前田千寸氏のご調査^[8]では、

白=梅110, 馬酔木13, つつじ3, 李1, 卯花21, 橘54, 浜木綿2, 計204首。

黄=山吹15, 女郎花12, 計27首。

紅=つつじ5首。

淡紅=桃11, 桜44, 唐棣花1, 容花4, 合歡3, 撫子25, 計88首。

赤=椿9, 百合9, 韓藍4, 山橘4, 計26首。

碧=紫陽花2, 桔梗4, 月草9, 計15首。

紫＝堇3，藤17，杜若4，計24首。

淡紫＝棟（あふち）4，葛2，萩107，計113首。となっており，万葉の花の色は「白」と「赤」と「紫」である。白系の花は204首，色彩語は302例で群を抜く頻度数である。また，赤系の花は紅＋淡紅＋赤で119首，色彩語が赤＋紅＋茜で72例，紫系は紫＋淡紫で137首・33例にのぼるから，万葉時代の日本文化は色彩面においてバーリン・ケイの文化度7の段階に到達していたと判断される。が，前田氏は「もみじ」を分類対象から外しており，それは黄か紅かの判断が困難だったからだとする。

前田氏は同じ書の中で「紅」についても触れ，「平安文化と紅染」の節で，奈良時代にはあまり使われなかった紅染が平安時代初期の終わり頃から俄に使われだしたと述べておられる。確かに「紅」は平安期になると急増しており，4,000首を越える『万葉集』でも色彩語「紅」は28例にすぎないのに，その2分の1ほどの分量しかない『枕草子』で25例を数える。

青系は花が15首，色彩語が69例，緑を加えても15首・80例にすぎないから，「万葉時代の基本色は赤と青である」とする中西先生のご指摘は，花の色彩カテゴリーや色彩語全体の頻度からみれば，疑問が残る。

また，色彩語「赤－緑」の現れ方が26首・28例－0首11例で，「青－黄」の15首・69例－27首・98連よりかなり低い。これも青・緑，赤・黄の意味領域に重なり部分があったことと関係があるろう。

5. 普遍性の検証

日本の色彩は「光」の明暗・顕漠から始まって次第に「色」へと発展していき，下池山古墳（3世紀末～4世紀初頭）で発掘された銅鏡に付着した絹布（班布か）には，「黄」「黄緑」「青（空色）」「茶色」が見られる。奈良から平安にいたるや『古今和歌集』あたりから「色離れ」が起きる。そして，自然物に作者の心を託して表現する，日本人独特の描き方が浸透していったようである。

しかし，これらの外界認知・言語化・表現の構造的変化などが，普遍論者の力説したように，一定のルールにもとづいて上代から現在にいたった

のか否かが議論の中心になっているが，古代の色彩語発達過程の一つ一つの認知の検証などできないので，現代における認知類型を調査し，そこから一般的な傾向を推論するという方法をとることにする。

認知類型の把握を目的とした調査を4回に分けて行った。多文化調査1（平成4年1～11月，日本人学生197名，留学生34名），同2（平成6年6～7月，日本人学生21名，留学生26名），同3（平成8年6～10月，日本人学生200名，留学生20名），多文化調査4（平成9年5月，日本人学生56名，留学生未調査）が，それである（調査項目には出入りがある）。

多文化調査1によれば，「色彩カテゴリー」と「日本語色彩語の意味領域」の認知類型は，次のとおりであり，日本人と外国人とはかなり似た類型を見せた。

▽日本人の色彩認知

- i 伝統文化継承型＝虹の七色。
- ii 軽度の日本文化継承型＝太陽の色，月の色，黄色の意味領域（茶封筒の色を黄色に含める），オレンジ色の領域。
- iii かなりの西欧文化受容型＝星の色。
- iv 異文化理解型＝なし。
- v 異文化理解難型＝なし。

▽外国人の色彩認知

- i 伝統文化継承型＝日本人並み認知は虹の七色，太陽の色。やや日本人に似ている認知は月の色。
- ii 軽度の日本文化継承型＝かなり日本人に近いのがオレンジ色の領域，やや日本人に似ているのが黄色の意味領域（茶封筒の色も黄色）。
- iii かなりの西欧文化受容型＝かなり日本人に近いのが星の色。
- iv 異文化理解型＝なし。
- v 異文化理解難型＝なし。

多文化調査3以降では，同1・2で認知差の目立った項目を柱にして，詳細な調査を行った。表2～表4は，その調査結果の一部をまとめたものである。

表2の外国人の色彩認知で，「意味領域」の重

表2 近接する意味領域の認知（平成6～8年，外国人）

色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色	色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色
1. 黄色	46	0	0	0	8. レンガの赤茶色	0	0	8	0
2. 黄土色・黄褐色	3	13	14	0	9. 果物のオレンジ色	0	41	1	4
3. 茶封筒の色	3	5	7	0	10. 果物の柿の色	0	37	0	6
4. tawny orange	3	5	14	0	11. 夕焼け空の色	0	17	0	26
5. 明るい茶色	0	8	32	3	12. 金魚の赤い色	0	6	1	24
6. 褐色	0	1	11	1	13. りんごの赤色	0	0	0	46
7. チョコレート色	0	1	9	0	14. 昼の太陽の色	4	17	0	16

注 被調査者46名。無回答項目あり。tawny orangeは黄褐色に近い茶色。

表3 近接する意味領域の認知（平成4～6年，日本人）

色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色	色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色
1. 黄色	216	0	—	—	8. レンガの赤茶色	0	41	—	—
2. 黄土色・黄褐色	90	38	—	—	9. 果物のオレンジ色	0	208	—	—
3. 茶封筒の色	15	0	—	—	10. 果物の柿の色	0	162	—	—
4. tawny orange	—	—	—	—	11. 夕焼け空の色	0	133	—	—
5. 明るい茶色	0	28	—	—	12. 金魚の赤い色	0	71	—	—
6. 褐色	0	10	—	—	13. りんごの赤色	0	0	—	—
7. チョコレート色	0	1	—	—	14. 昼の太陽の色	38	81	0	97

注 被調査者216名。—は当時未調査の項目。無回答項目あり。

表4 近接する意味領域の認知（平成9年，日本人）

色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色	色彩カテゴリー	黄色	オレンジ	茶色	赤色
1. 黄色	56	0	0	0	8. レンガの赤茶色	0	8	29	11
2. 黄土色・黄褐色	24	0	2	0	9. 果物のオレンジ色	0	55	1	0
3. 茶封筒の色	5	0	6	0	10. 果物の柿の色	0	46	2	2
4. tawny orange	0	13	32	2	11. 夕焼け空の色	0	38	0	18
5. 明るい茶色	0	58	11	12	12. 金魚の赤い色	0	12	0	42
6. 褐色	0	4	35	3	13. りんごの赤色	0	0	0	56
7. チョコレート色	0	0	45	0	14. 昼の太陽の色	7	25	0	24

注 被調査者は56名。無回答項目あり。

なりが見られるのは、「黄土色・黄褐色」における「黄色」「オレンジ色」「茶色」の重なりなど11カテゴリーにのぼる。これは調査カテゴリーの78.6%に相当する。表3では未調査項目があるので、意味領域の重なりは2カ所のみにとどまるが、表4でも11カテゴリーにおいて重なっている。

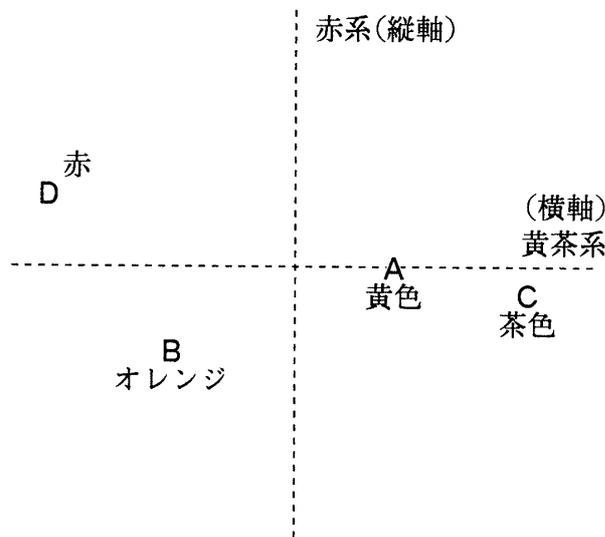
表2の認知差に、民族や母語の違いが反映されていることは容易に想像できるが、同一民族・同一母語の若年層を調査・整理した表3や表4にお

いても認知差が見られるということは、民族や言語以外に認知差を発生させる要因があるということになる。

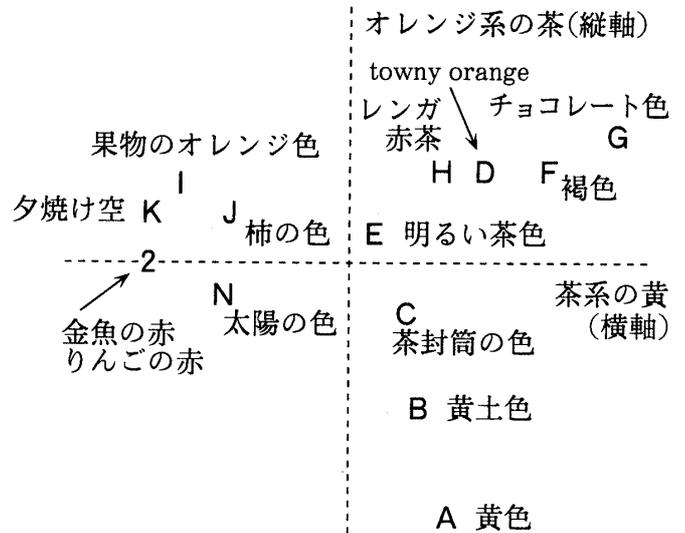
表2のデータを因子分析し、バリマックス回転してからプロット表示したのが図Eである（これは同様の方法で表4から作成したプロットも大差はない）。色彩語「黄」と「赤」の距離は遠いのである。

また、表4のデータを主成分分析しプロット表

図E 色彩語の分布



図F 色彩カテゴリーの分布



示すと図Fになる。表4と図Fから、現代語においては、黄と赤とはかなり遠い意味領域にあり、したがって上代のような意味の重なりが起らないことが読みとれる。

色彩語の論理的意味・中心的意味だけでなく感情的意味・周辺の意味においても、認知差が観察された。例えば、多文化調査1での「色彩語の周辺の意味」では、白・黒・赤・オレンジ・黄・緑・青・紫・藍・空色の10色について、

1. 幸福, 2. 吉, 3. よろこび, 4. 希望,
5. 熱情, 6. 豊かさ, 7. 収穫, 8. 明るさ,
9. はなやかさ, 10. 美しさ, 11. 永遠, 12. 夢,
13. 恵みを与えてくれるもの, 14. 生氣<セイキ>を与えてくれるもの, 15. 物語, 16. 信仰,
17. 儀式, 18. 神, 19. 仏, 20. 春, 21. 夏,
22. 秋, 23. 冬, 24. 男, 25. 女, 26. 不幸,
27. 不吉, 28. 悲しみ, 29. 死, 30. 大地を干上がらせる嫌なもの。

の中から該当するものを選んでもらい、^[9] 表5をもとにデータの類似度(ピアソン係数)を計算してからプロット表示すると、西欧の「赤」が浸透したためであろうか、「黄」と「赤」が同じ象限に属している(プロット図は略す)。また、全く同じ調査項目で外国人留学生を調査した表6のデータをもとに分析しプロット化すると、おおむね日本人と同様の分布となる。被験者全体ではいかに

も普遍性がありそうに見えるものの、個々の被調査者を比較すると大幅な認知差が観察され、周辺の意味の意味領域においても、相対論でなければ説明のつかない言語事象の存在することが分かる。

6. 黄の重要性

最後に、第1節で言及した普遍論の主張点(1)~(5)と相対論の(a)~(c)の是非に触れる。(1)バーリン・ケイの指摘した主要色彩語11語のうち、茶色・橙色・ピンク・灰色の4語は『万葉集』に用例がゼロないしはそれに近い。これを図Bのバーリン・ケイの系列図で見ると、文化度5に相当する。しかしながら、当時の日本ではすでに文化度7の紫がよく使われていたわけだから、系列図Dのようになっていたと考えるべきであろう。

また(ア)「白」「黒」「青」「赤」のみが末尾に形態素{-i}をつけて形容詞を作る古い語であり、(イ)古代中国で「青赤白黒」が春夏秋冬を、「青白赤黒」が「東西南北」を指していたこと、(ウ)片山龍峯氏の調査によれば沖縄県国頭村^{くにがみ}の90歳の話者・玉城ヤマトさん^{たましろ}が色彩カテゴリー「黄」をアヲと呼んでいたという事実からみて、日本語の色彩語「青」が「黄」の前に存在していなければならず、「黄赤」の存在をも考慮すると「青」は「赤」の前に位置していた可能性が高い。『時代別国語大辞典』上代編には「アヲは黒と白の中間的性質を

表5 色彩語の周辺の意味領域 (H4日本人)

意味	赤	黄色	緑	青	紫	白	黒	空色	オレンジ	藍色
1. 幸福	50	45	9	5	5	23	0	10	30	3
2. 吉	45	20	6	5	13	12	0	8	12	6
3. よろこび	28	33	11	5	2	12	0	25	36	0
4. 希望	22	52	21	18	0	9	0	39	28	13
5. 熱情	91	3	0	0	2	0	1	2	21	0
6. 豊かさ	171	39	86	4	2	0	0	5	44	5
7. 収穫	10	73	47	0	0	0	0	3	47	0
8. 明るさ	32	74	4	8	2	19	0	30	66	1
9. 華やか	42	19	0	3	3	5	0	5	44	3
10. 美しさ	11	5	10	41	39	36	4	24	12	27
11. 永遠	10	3	12	48	27	53	16	28	0	24
12. 夢	7	9	4	21	25	34	3	49	11	22
12. 恵み	9	16	54	8	1	0	1	5	26	2
14. 生气	26	8	49	15	1	5	1	17	6	1
15. 物語	2	4	6	15	14	6	5	12	0	17
16. 信仰	6	6	1	13	28	24	7	8	1	12
17. 儀式	4	3	1	2	43	40	44	18	0	23
18. 神	9	10	1	3	17	42	5	1	2	4
19. 仏	1	5	1	0	20	16	13	2	1	22
20. 春	1	9	62	4	7	1	0	14	8	0
21. 夏	46	11	31	57	2	1	0	37	17	2
22. 秋	12	34	0	1	3	2	0	9	24	5
23. 冬	3	1	0	7	4	99	7	5	1	22
24. 男	3	1	1	39	3	1	10	1	6	2
25. 女	39	0	0	1	16	12	2	0	2	2
26. 不幸	0	0	0	4	14	12	87	1	0	18
27. 不吉	4	2	1	5	25	12	92	0	0	11
28. 悲しみ	0	1	0	34	9	6	48	13	0	42
29. 死	2	0	0	1	1	6	136	0	0	6
30. 大地を干す	4	2	0	0	4	0	14	1	2	1

表6 色彩語の周辺の意味領域 (H6 外国人)

意味	赤	黄色	緑	青	紫	白	黒	空色	オレンジ	藍色
1. 幸福	6	2	1	0	0	0	0	0	1	2
2. 吉	13	0	0	0	1	2	0	0	0	0
3. よろこび	5	1	0	0	0	0	0	0	2	1
4. 希望	3	0	6	4	0	0	0	0	0	1
5. 熱情	16	3	0	0	0	0	0	0	1	3
6. 豊かさ	0	3	2	2	0	0	0	0	2	1
7. 収穫	0	10	2	1	0	0	1	0	3	0
8. 明るさ	4	4	0	3	0	5	0	2	3	1
9. 華やか	0	2	0	0	6	0	0	0	2	1
10. 美しさ	0	0	0	1	2	2	0	2	0	5
11. 永遠	0	0	1	2	2	3	3	0	0	3
12. 夢	1	1	0	2	7	1	0	3	0	4
12. 恵み	0	1	3	2	1	0	0	0	1	0
14. 生气	3	2	6	3	0	0	0	0	0	1
15. 物語	0	1	0	0	2	0	0	1	3	2
16. 信仰	0	2	0	0	0	3	1	1	0	0
17. 儀式	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0
18. 神	0	1	0	1	0	7	0	1	0	1
19. 仏	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0
20. 春	0	0	15	0	0	1	0	1	0	0
21. 夏	0	1	1	1	1	0	0	3	0	1
22. 秋	0	8	0	0	1	1	0	1	3	1
23. 冬	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0
24. 男	1	0	1	1	0	0	1	0	0	1
25. 女	1	0	2	0	0	2	0	0	1	0
26. 不幸	0	0	0	1	0	1	9	1	0	0
27. 不吉	1	1	0	1	0	0	9	0	0	0
28. 悲しみ	0	0	0	0	0	2	11	1	2	1
29. 死	2	0	0	1	0	3	14	2	0	0
30. 大地を干す	1	0	0	1	0	0	1	2	1	0

もつ範囲の広い色名で、おもに青・緑・藍などを指し、ときには黒・白にも及びうるものであった。」とあることも考慮し、「青」の獲得を先と考えたい。

普遍論の主張点(2)はどうか。(2)は色彩カテゴリーの広がりとは個別言語で差があるものの色彩カテゴリーの焦点は同一であるという指摘であったが、『万葉集』に「黄赤」と思われる色彩領域が観察され、それが後に「黄」と「赤」に分化していったわけであるから、ヨーロッパ語の red と万葉の赤の色彩カテゴリーの焦点が同一であったとは認定できない。

普遍論の(3)文化の発達につれて民族は色彩語の数を増やしていく、(4)色彩語の発達には一定の系列が観察されるという2点は、日本語にもおおむね当てはまるものの、青・赤・紫についてはバーリン・ケイの系列図には該当しない。

(5)色彩語獲得の過程には常に普遍性の原理が働いているという主張は、たびたび論じてきたように首肯できない。

一方、相対論の主張についてはどうか。(a)どの民族にとっても外界の物理的スペクトルは変わらない、(c)認知差を反映して語形とその意味領域の違いが生成されるという2点は、そのとおりである。(b)言語により色彩認知枠の違いが生まれるという点は、同一言語による認知枠の調査で表2～6のような認知差が出たこと、同一市町村においてさえ顕著な認知差が観察されたことにより、普遍論はもちろん、母国語の異なりが認知差を生むとする類の言語相対論(サピア・ウォーフ)の主張も説得力を失う。

このようなことから、色彩カテゴリーの認知と色彩語の関係については、普遍論より相対論に歩があり、認知は言語・年齢・性・社会階層・時代・社会習慣など複雑な要因に左右されている、と結論づけられる。

注

- [1] Revesz, G. (ed.) (1954) *Thinking and Speaking*, North-Holland.
 [2] Berlin, B. & Kay, P. (1969) *Basic Color Terms, Their Universality and Evolution*.

University of California Press.

- [3] 用語の混乱を避けるため、本稿では「色彩カテゴリー」は外界に対する色彩認知枠、「意味領域」は語形の指し示す色彩範囲の意で用いることにする。現代では色彩語彙が豊富になったので、色彩カテゴリーと意味領域は重なることが多いが、色彩語が未発達な時代・地域においては、色彩カテゴリーが存在しても、それに対応する語形が存在せず(語形の欠落現象)、意味領域も存在しないことが少なくない。
 [4] 筆者が行った平成4～6年の多文化調査でこのことが分かった。調査資料と解析結果は『日本語語彙の研究』(武蔵野書院、平成8年)第10章に記した。
 [5] 中西進「万葉の色」(『日本の色』朝日新聞社76頁)。
 [6] 棚村寛子・平澤洋一による『万葉集』色彩語彙の調査。平成6年。
 [7] 本稿での白は、竹井邦彦『日本色彩事典』の解釈に従う。白は光をすべて反射してしまい、色相を有しない色ではあるが、反射率100%の色は存在しないので、もっともこれに近い色を便宜的に白とする。
 [8] 前田千寸『むらさきくさ』(河出書房、昭和31年、210頁)。
 [9] 素データは表5に示した。

1997年5月28日受理
 1997年7月23日採録



平澤 洋一 (ひらさわ よういち)
 1965年東京都立大学人文学部卒業。
 1974年東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了。國學院大学日本文化研究所研究員を経て、現在城西大学女子短期大学部教授。

専門は国語学。国語学会、全国国語国文学会、日本語教育学会、日本民俗学会、情報処理学会、教育システム情報学会、各会員。